木田市長の ど～んとコミュニケーション

真珠のように輝く
まちづくりのために

vol.74

火の用心

「火事とけんかは江戸の華」ということばがあります。

消火にしても、けんかにしても、命を張って行動する火消したちの心意気を、江戸の町民たちが華として讃えたことばだろうと思います。江戸の町の人口は約１００万人あったとも言われ、当時としてはロンドンやパリよりも大きな町であり、世界一であったという説もあります。享保10年（１７２５年）の資料によると、江戸の町の人口密度（1平方キロ当たりの人口）は、６８、８０７人と超過密であり、当然びっしりと木造の家が建ち並んでいました。

当時はポンプ車も消火栓もありませんので、一旦火事が起これば大変なことになったはずです。特に風の強い日に火事となり、江戸の町が灰になってしまうということは度々起こっています。当然、住民の一人ひとりが「火の用心」ということを十分、認識して実行していたことでしょう。

鳥羽市の離島地域も江戸の町に負けず劣らず、人口密度が高く、家々がびっしりと建ち並んでいます。それだけに「火の用心」の意識も高いものがあります。神島ではくわえタバコで歩くなという標識があちらこちらに貼られています。答志では子ども会も含めて防火パレードが行われています。また、桃取、小浜、安楽島、今浦などでも夜廻りが行われています。坂手では昔から続く「火の用心」のための仮装行列が現在も続けられていて、火の用心の歌を歌いながら仮装して町中を練り歩きます。わたしも２回ほど参加させてもらいました。その歌の中に「火事を出すな。火のもと七代　うらまれる」という意味の歌詞があって、その現実的、かつ強烈なことばに、火事に対する強い思いを感じました。

ところで近年、市内で家火事が度々発生しています。昨年、今年と２年連続で、火事による犠牲者も出てしまいました。亡くなったかたやその御家族には、本当にお気の毒であったと思います。今後、このような悲劇が起こらないように願っています。また、万が一発生しても火事をボヤでとどめるために、初期消火に効果のある消火器を備えたり、風呂の水を防火のためにためておくことなど、さまざまな準備が考えられます。

消防力の強化によって、大規模な延焼などは避けられるようになってきました。しかし、原点に戻って、「火事は怖い」という想い、「火事は出さない」という決意が求められていると思います。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.115

人権文化の構築のために

昨年の12月５日、鳥羽商工会議所かもめホールにおいて、市内中学校の生徒64名が集まり人権フォーラム（11月28日は小学校）が開催されました。

この人権フォーラムは、身近にある差別の現実に気付き、差別と向かい合い、それを乗り越えていく意欲と態度を育てること、そして学校を超えた豊かな出会い・学びの場として位置づけ、参加生徒が学習したことや思いを出し合うことで、人権と部落差別の問題に対する正しい認識を深め、感性や実践力の育成をめざして５年前から実施しています。

はじめに、全体会の中で２校の代表生徒が作文発表を行いました。自らの経験から「障がい」がある人への関わりや社会の役割、そして人権・部落問題学習の中で初めて知った部落差別の問題について真剣に考え、学年で取り組んだことを発表しました。

参加生徒の中からは、『「障がい」がある人が困っていたら、勇気を持って自分にもできることをしたい』、『授業で部落差別のことを勉強した。今までは全く知らなかったが、知るだけでなく、そこから差別をなくすために、どうしたらよいかを考えていきたい』、『部落差別の問題は、わたしたちの世代が大人になり真剣に考えていったら、なくせる問題だと思うから、これからも正しく学んで、この問題をなくしていきたい』など、理不尽な部落差別の解決や「障がい」がある人への心温まる理解と気付きの大切さについての意見が出されていました。

その後は、全体会での意見交流を受けて、人権に関わるさまざまな問題や各学校での取り組みの紹介など、人権問題についての考え方や理解を深めることができました。

人権文化に満ちあふれた社会の構築には、とても大事な人権フォーラムでした。